戦前の高尾山　冬と夏の風物詩

練馬区　安宅達利

一、冬の風物詩
「高尾山頂のスキー場」

今年は明治四四年（一九一一）にオーストリアのレルヒ少佐が日本にスキーを伝えて一〇〇年に当たり、全国各地でさまざまな記念の行事が行なわれている。スキーは戦前、深雪の中や険しい坂でも容易に踏破できる特性から体育向上や軍事的にも推奨され、急速に普及していった。そして早くも、昭和三年（一九二八）の第二回冬季五輪サンモリッツ大会には、日本からスキー競技に六人の選手が参加するまでに至る。

ところで首都圏のスキー場といえば、今は所沢市の狭山スキー場（昭和三四年開業）が有名であるが、同スキー場開設のはるか以前、昭和初期に高尾山頂がスキー場として東京近郊のスキーヤーに一役買っていたのである。当時の高尾山頂付近は樹木に囲まれた現在とは違い、かなりの部分がすすきの原野であった。特に山頂西側の奥高尾縦走路方面は降雪時には恰好のゲレンデとなり、地元の浅川町や青年団の人達により昭和五年頃からスキー場として開発されだした。

スキー場は、薬王院や地元の人達の宣伝とスキー場への道の大幅拡幅等の献身的な整備努力により、開設まもない頃から大手新聞にもしばしば紹介され、東京より至近ということもあってスキー愛好家の注目を集めていた。（なお昭和二年に開通した高尾山ケーブルカーもスキー客の便にいたって効果があった。）

特に昭和七年暮～八年初頭は多雪の日が多く、スキーヤーで賑わった。当時の読売新聞三多摩版の記事からその状況を見てみたい。「高尾山上積雪約三〇センチ、昨夜から今朝にかけ各地のスキーヤー詰めかけ大賑わい。浅川町青年団では総出で麦湯の接待を計画。」（昭和八年一月一八日付）、「一昨日の高尾山上積雪約三〇センチ、東京方面のスキーヤー大喜びで大賑わいを呈す。東京の二（雙?）葉女学校生徒二十余名のスキー姿も。」（同年一月二四日付）、「昨日朝より降雪あり。高尾山上は大人や子供のスキーヤーで大賑わい。」（同年二月一八日付）。

高尾山頂のスキー場は、冬晴れのもと正面に富士山と丹沢の山々を望むパノラマのようなコースが展開し、昭和一〇年頃まで学生をはじめとしたスキーヤーのはつらつとした声が響いていたが、折からの戦局の激化により、こうした姿も徐々に影をひそめていった。

二、夏の風物詩
「高尾山納涼の夕べ」

現在の高尾山の夏の風物詩といえば、山上から眺める眼下の素晴らしい夜景とともに楽しむビヤガーデンは必ずその一つにあげられるが、昭和初期にもその原点とも言うべき「高尾山納涼の夕べ」が開催され、長引く経済不況下の人々に元気を与えていた。

その状況を当時の読売新聞三多摩・埼玉版は次のように伝えている。「（昭和五年の）『高尾山納涼の夕べ』は高尾登山鉄道（ケーブルカー会社）・武蔵中央電気鉄道（八王子市内と高尾山をつなぐ市街電車）等の主催により八月中の毎週日曜日開催。今度の八月十日の日曜日は余興として宝さがし・高尾踊り・筑前琵琶演奏・浪花節等が行なわれ、開催当日、上記二社は運賃を半額にして来場を応援。」

また、昭和七年（一九三二）八月六日の「高尾山納涼の夕べ」では、高尾山上に川越市の青年達による盆踊りや太神楽が繰り広げられた。この頃の「高尾山納涼の夕べ」は、地元郷土芸能の出演を中心として薬王院や地元の方々が一体となり手作りで実行されていったものであり、また人々の手軽に納涼を楽しみたいというニーズと高尾山の自然とがマッチした好企画であった。

その後、この企画は戦中・戦後の混乱の中でしばらく中断されていたが、昭和二九年（一九五四）に見事に復活した。

『高尾登山電鉄復活三〇年史』によれば、同年八月一日に第一回「高尾山納涼映画の夕べ」が実施され、好評により同月の毎週末開催された。高尾登山電鉄のケーブルカーも夜十時まで運転時間を延長し当日の旅客輸送に応えている。

翌三〇年七月二五日の第二回にはハワイアンの軽音楽演奏も行なわれ、高尾山上での夕涼みに華を添えた。さらに三二年には「高尾山納涼の夕べ」のネーミングも復活、一流歌手を招いての歌謡ショーや素人のど自慢大会も開催され始める。

『高尾山報』の創刊の月、昭和三四年八月には「高尾山納涼の夕べ」第一夜としてコロムビア・ローズショー、第二夜は青木光一（現在・日本歌手協会名誉会長）ショーが行われ、毎回一〇〇〇名を超える観客が詰めかけた。翌年七月三一日の「高尾山納涼の夕べ」には歌手春日八郎（昭和最大のヒット曲「お富さん」の歌手）が出演、高尾山の夏の呼び物行事として地元はもとより東京近辺の人々にとって夏の風物詩として定着していった。

雪・待ち構へたスキーヤー
俄然高尾山は大賑ひ

八王子地方は廿一日夜来の雪が廿二日正午に至り約五寸、高尾山上は八九寸に達したので待ち構へた東京方面のスキーヤーは大喜び大見晴臺から[illegible]山付近にかけて大賑ひを呈したが特に東京二葉女學校生徒二十餘名のスキー姿が人目を惹いた【寫眞はスキー光景】

高尾山頂スキー場の状況を伝える新聞記事
（『読売新聞』三多摩版　昭和8年1月24日付）

「高尾山納涼の夕べ」（昭和30年代頃）
〈『高尾登山電鉄 復活30年史』より〉

高尾山報助成金志納者御芳名

川越市	荻窪一郎
小平市	渡辺正一
所沢市	木下幸二
八王子市	谷合高道
〃	瀬沼和重
日野市	天田清野
〃	糸井千鶴子
館林市	田村亥一
八王子市	㈲サンファミリー企画
秩父郡	内海武芳
太田市	高野さき子
八王子市	小池まり子

（順不同・敬称略）

弘法大師いろは加留多 26

句・菅谷秀文

の　野や山を跋渉（ばっしょう）厳し修行日々

絵・橋本豊治

大学入学後、ひとりの沙門に出会い虚空蔵求聞持法の伝授を受ける。私度僧となり、山岳行者になり修行を続ける。求聞持法・断食・崖から身を投げる捨身の行をしたと言う。空海の姿は、乞食も顔をそむけるいでたちであったと言う。

「山岳行者の行くところ鉱山あり」空海の修行の足跡はとりわけ水銀と密接にかかわっている。水銀は薬用、地金の精錬（せいれん）や寺院の彩色（丹塗り）に使われた。